

こよみ



2010年6月30日

コールセンターからの小さなよみもの



Vol.18

インデックス
運用

こんなときに、 なぜギリシャを外さなかったの？



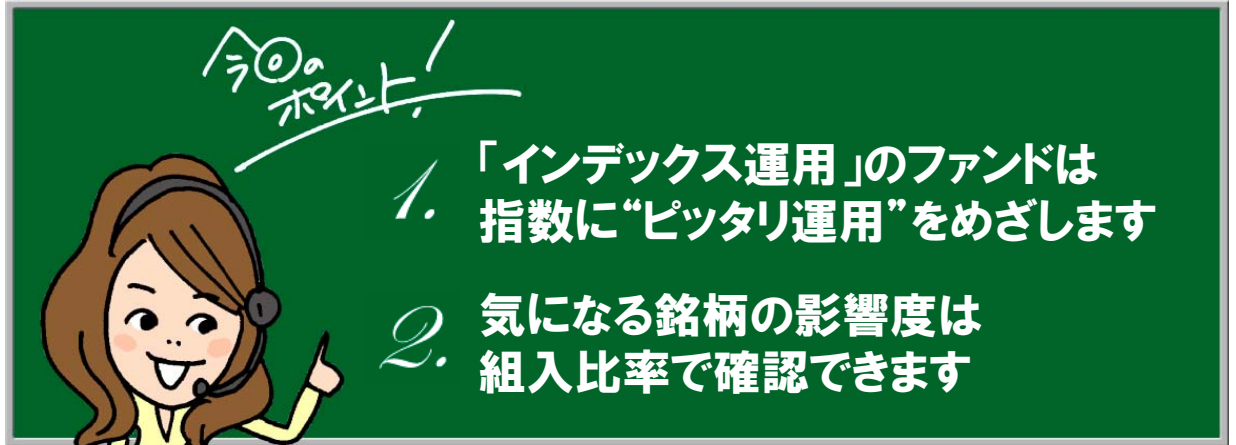
ギリシャ問題に端を発したヨーロッパ諸国の財政不安を受け、「私のファンドに組み入れはあるの？」「なぜこの国を組み入れ続けるの？」といったお問い合わせがコールセンターに多くありました。前回(2010年5月)の「こよみ」でもお伝えしたように、財政不安を抱えるユーロ圏の支援として、EU(欧州連合)とIMF(国際通貨基金)が協力して約89兆円(7,500億ユーロ)の枠組みを創設したこともあって、相場はひとまず落ち着きを取り戻していますが、やはり不安なニュースを見聞きすると、どうしてもファンドへの影響が気になるところです。

そこで皆さまには、次の2点を押さえていただきたいと思います。

1. 「インデックス運用」のファンドは指数に“ピッタリ運用”をめざします
2. 気になる銘柄の影響度は組入比率で確認できます



コールセンターからの小さなよみもの



1. 「インデックス運用」のファンドは指数に“ピッタリ運用”をめざします

ファンドを運用する方法には、大きく分けて「インデックス運用」と「アクティブ運用」があります。「インデックス運用」は、例えば日経平均株価のような特定の指数に対して“ピッタリ運用”をめざすタイプ、もう一方の「アクティブ運用」は、投資対象の中から銘柄などを選別するときに“良いところ選び”をするタイプです。

「インデックス運用」は指数の動きこそがファンドの運用成果になります。例えば日経平均の「インデックス」ファンドは、日経平均株価が2%上がれば2%上がり、1%下がれば1%下がることをめざして運用されます。日経平均株価は、日経新聞社が日本株式の全体的な動きをあらわす指数として、独自に銘柄を選び算出・発表しているものですが、インデックスファンドの運用においては、同じ動きをするように運用会社が基本的に日経平均と同じ銘柄を選び運用しています。

つまり、今回の「ギリシャをなぜ外さないの？」については、もしそのファンドがインデックスファンドの場合には、指数の算出会社が指数の条件に合わなくなったと判断し銘柄変更をしない限り、指数を無視して銘柄変更はしないのです、というのが答えになります。なぜなら、指数の構成銘柄が変わってないのに、運用会社が勝手に変えてしまったら、その指数とは違う運用成果になってしまうからです。



コールセンターからの小さなよみもの

一方、「アクティブ運用」は、それぞれのファンドの投資対象の中で“良いところ選び”をします。そのためには、投資対象をじっくり調査し、現状や今後を見据えたうえで投資を行なう、つまり運用会社が投資対象の中からのどの銘柄を選ぶかに運用成果がかかっています。市況の変化や選ばれた銘柄の実力が発揮されるタイミングなどによっては、ターゲット(指数)の動きより良いときも悪いときもあります。それでもターゲットより上をめざすために、運用会社が“良いところ選び”をするのが「アクティブ運用」です。

運用会社が銘柄選びを積極的にする「アクティブ運用」のファンドは、信託報酬が高めで、反対にインデックス運用は低め、という違いもあります。銘柄選びに運用会社がどのように係わっていくかによって、運用の狙いやコストに違いがあるということです。

	インデックス運用	アクティブ運用
銘柄選び	指数の構成銘柄に 制約を受ける	運用会社の判断で “良いところ選び”をする
運用の狙い	ターゲットと 同程度の成果	ターゲットを 上回る成果
ファンドのコスト	低め	高め

2. 気になる銘柄の影響度は組入比率で確認できます

それでは、気になる国や銘柄がファンドに組み入れられている場合は、どのように考えればよいのでしょうか。

不安を抱える国や企業がファンドに組み入れられていれば、その銘柄の影響をファンドは直接受けることになりませんが、その影響度合いはファンドが全体のどれくらいの比率でその銘柄の組み入れているかによって全く異なります。これを「組入比率」といいます。現在の基準価額とその「組入比率」を掛けることで、大雑把ながらもその銘柄の最大の影響度合い、つまり無価値になったとしたときの最大損失のイメージがわかります。



コールセンターからの小さなよみもの

しかし、全銘柄の組入比率がわかる運用報告書は多くて年2回の発行であり、毎月発行のマンスリーレポートでは上位10位程度しか公表されないため、気になる銘柄の最新の組入比率を知ることが簡単でない場合もあります。

そこで参考になるのはそのファンドが目安としている指数の組入状況です。インデックスファンドの場合は、その性質上、指数の組入比率とファンドの組入比率はかなり近い数字のはずです。最近のお問い合わせで多かったギリシャを例にすると、海外債券の代表的な指数である「シティグループ世界国債インデックス」という指数には、5月末現在のギリシャ国債の組入比率は1.34%でした。この指数への“ピッタリ運用”をめざすインデックスファンドであれば、同じ程度の影響や組み入れの可能性が予想できます。どうでしょう。この数字がわかることによって、それまでの漠然とした不安が少し具体的にイメージできるようになるのではないのでしょうか。

なお、この指数を算出しているシティグループでは、6月中旬に格付会社がギリシャを格下げしたことを受け、6月末に指数から除外することを発表しています。この発表を受けて、この指数に連動することをめざす「インデックス運用」のファンドは、ギリシャを除外した指数への連動をめざすことになります。

「インデックス運用」と「アクティブ運用」には、銘柄選びに運用会社がどのように関わっていくかの違いがあります。指数と“ピッタリ運用”をすることをめざす「インデックス運用」と、運用会社の判断で“良いところ選び”をする「アクティブ運用」と、それぞれの特長が相場環境の変化の中で強みにも弱みにもなりえます。ファンド選びの際は「インデックス運用」なのか「アクティブ運用」なのかについても、確認してみてくださいね。

nikko am



コールセンター

0120-25-1404

営業時間 平日 9:00~17:00

